

ロシア

第1四半期の経済概況

中国など新興国がリードする形で、世界的に経済の先行きに対する明るい見方が広がる中、ロシア経済も回復の動きを見せつつある。しかしながら、その足取りは必ずしもしっかりしたものではない。2010年第1四半期の鉱工業生産は前年同期比5.8%の増加であったが、これは前年同期にマイナス14.3%という大幅な減少を記録した反動であり、世界同時不況以前のレベルには戻っていない。季節調整後の生産指数を産業別にみると、鉱業の生産は2007年平均を約4%上回るレベルに達しているが、製造業は10～11%程度下回っている。鉱業の回復が早く、製造業が遅れている状況は、業況判断DIにも反映されている。鉱業では、2008年11月以降マイナスであったが、2010年4月には0となった。これに対して、製造業では、2009年1月を底として回復傾向にはあるものの、2010年4月でもマイナス6を記録した。この違いについては、鉱業の回復は主に外需によるものであり、逆に内需の盛り上がり欠けることが製造業のもたつきにつながっていると考えられる。

内需の柱の一つである固定資本投資は、3月になってようやく下げ止まる気配が見られるものの、以前として低い水準にある。

また、2010年第1四半期の小売売上高は、前年同期比1.3%増にとどまった。これは、実質可処分所得が7.4%増加したことと比べると、小さな伸び率である。これには、家計の貯蓄性向が高まっていることが影響している。2010年第1四半期の家計貯蓄率は15.8%で、前年同期（8.7%）の約2倍となっている。なお、実質可処分所得が1月に大きく伸びているのは、年金制度の改訂で2002年以前の年金加入期間分が再評価されたことに伴い、年金支給額が大幅に引き上げられたためである。

拡大する貿易

税関統計によれば、2010年1月の輸出は276億ドル、2月は303億ドルで、それぞれ対前年比55.4%増、65.2%増であった。こうした大幅な増加は、主として原油などのロシアの主要輸出資源の価格が上昇したためである。例えば、2月の原油輸出量は2,014万トンで前年同月比6.9%増であったが、原油輸出額は102億ドルで83.4%増であり、平均価格は約1.7倍になっている。

1月の輸入は97億ドル（前年同月比11.4%増）、2月は140億ドル（同16.1%増）であった。輸出ほどではないが、大きな伸びを示している。要因としては、前年同期の水準が低かったことのほか、通貨ルーブル高が進んでいることが挙げられよう。ルーブルの実質実効為替レートは3月までの3ヶ月間で7.3%も強くなった。

品目別にみると、食品・農産物が23.1%増加していることが特徴的である。リーマンショック以降、国産品回帰の動きを見せたロシアの消費者が、ここにきて再び輸入製品に手を出し始めているのではないかと。1月、2月には、ネットショッピング利用者急増などにより外国から届く国際郵便貨物が大幅に増えて、税関が処理しきれなくなり、国際郵便やクーリエ貨物などに数日から10日程度の遅延が発生したとも伝えられている。

資源輸出による外貨の獲得とルーブル高の進行により消費財の輸入が増加するという2007年までの構造が復活しつつある。この先、順調に経済回復が続いて、企業の設備投資意欲が高まれば、固定資本投資の増加も期待される。ロシア政府が省エネルギーやエネルギー効率向上を優先政策課題として推進していることもあり、これらを踏まえて企業が真剣に新しい生産ラインの導入や既存設備の更新に取り組むのであれば、日本など先進諸国からの機械・設備などの資本財の輸入が増えると思込まれる。

（ERINA調査研究部研究主任 新井洋史）

（前年同期比%）

	2005	2006	2007	2008	2009	2010			
						1Q	1月	2月	3月
実質GDP	6.4	7.7	8.1	5.6	▲7.9	—	—	—	—
固定資本投資	10.9	16.7	21.1	9.8	▲16.2	▲4.7	▲8.7	▲7.4	0.7
鉱工業生産高	5.1	6.3	6.3	2.1	▲10.8	5.8	7.8	1.9	5.7
小売売上高	12.8	14.1	16.1	13.5	▲4.9	1.3	0.0	0.9	2.9
実質可処分所得	12.4	13.5	12.1	1.9	2.3	7.4	15.5	5.0	4.2
消費者物価*	10.9	9.0	11.9	13.3	8.8	3.2	1.6	2.5	3.2
工業生産者物価*	13.4	10.4	25.1	▲7.0	13.9	2.7	▲1.1	0.9	2.7

*前年12月比。

**斜体は暫定推計値

出所：『ロシアの社会経済情勢（2010年3月号）』ほか、ロシア連邦国家統計庁発行統計資料